

6

世界を一仏土に ―石橋湛山の挑戦―

平成27年9月、第48回中央教化研究会議は「石橋湛山とその時代」をテーマに開催された。開催趣旨は次のように記されている。

戦後70年を迎え、戦争を間接的にしか知り得ない国民が多くを占める今、あらためて戦争と平和について考える時がきていると思われまふ。

本年の中央教研は、我々がこの戦後70年を考える上で、第55代内閣総理大臣に就任した石橋湛山をとりあげます。氏は、身延山久遠寺第81代法主となった杉田日布の長男として生まれ、戦前はジャーナリストとして、また、戦後には第16代立正大学学長等の役職を務められましたが、その言論や行動の中に、日蓮聖人から受けた影響をうかがうことが出来ます。

湛山（1884-1973）は甲府一中時代、17歳のとき校友会誌に執筆した随筆に次のように述べている。

- 西洋では、宗教の勢力と言ふものは、実に非常のもので、西洋史を一寸読んで見ても、其社会に及ぼした感化が偉大なものであることが解る。然るに今日本の宗教は如何であるか（略）
- 惜しい事には、大聖仏陀が幾多難行苦行の結果、能く衆生の暗を滅せんとし給へる仏教も、彼ら僧侶信徒の為めに滅茶苦茶にされてしまふ。
- すでに、墓の外、葬式の他には、実力を失ふた仏教が、などで、国教とするの価値があろう。如何にして日本を仏教国なりと誇ることが出来よう。
- 実に、今日の仏教僧などは、却て仏教をつぶす悪魔である。…

と、仏教界を批判し、開目抄の三大誓願を引用しつつ、告白する。

- 吾れは、其の様に血と涙とを以て、国の為に尽す様な人物を是非現今日本の社

会へ欲しい。宗教界にせよ、政治界にせよ。

この一節をうけて、基調報告「三大誓願に生きる 石橋湛山の信仰」は次のように言う。

この文章には、のちの湛山の人生が暗示されているようです。湛山の言論、行動を支えたものは、この開目抄の一節に代表される日蓮聖人への信仰でありました。

基調報告では、昭和20年8月15日の敗戦から三日後、8月18日の『石橋湛山日記』が紹介された。

昭和20年8月18日（土）

考えて見るに、予は或意味に於て、日本の真の発展の為に、米英等と共に日本内部の逆悪と戦つてゐたのであった。今回の敗戦が何ら予に悲しみをもたらさざる所以である。

「逆悪」と戦つてきた61歳の湛山を内面から支えていたものは、宗祖の「智者に我義やぶられずば用いじとなり」ということばだったのではないか。

戦後、吉田内閣の大蔵大臣、鳩山内閣の通産大臣をつとめ、昭和31年、内閣総理大臣に就任。しかし、病気のため、いさぎよく辞任した。

首相を辞任した後、湛山の平和への思いは深まり、日米安保体制に代わる新しい体制——日中米ソ平和同盟を構想します。

今や世界は未曾有の危機に瀕し、一朝誤れば、人類破滅の悲惨さえ生ずるかにいわれております。この事態を救うものは、世界を一仏土にする平和の教えのほかにはあるまいと思ひます。

このように東西冷戦、核の危機が到来した世界に向けて、湛山は法華經の教えが必要であることを痛感していたことが、基調報告で述べられた。

すべての国に対し、謙虚な気持ちをもって、相手国の立場を理解する努力を怠ってはならぬ。

と湛山は述べている。「一仏土」の教えを、戦前さかんに宣伝された「八紘一宇」のように理解してはならないことは言うまでもない。

では、戦後70年の今日、私たちは、世界における日本の生き方を、どのように考えたらよいのだろうか。

早川誠氏（立正大学法学部教授）の基調講演「石橋湛山——平和への願いと行動——」に引用された、湛山のことばを忘れることはできない。

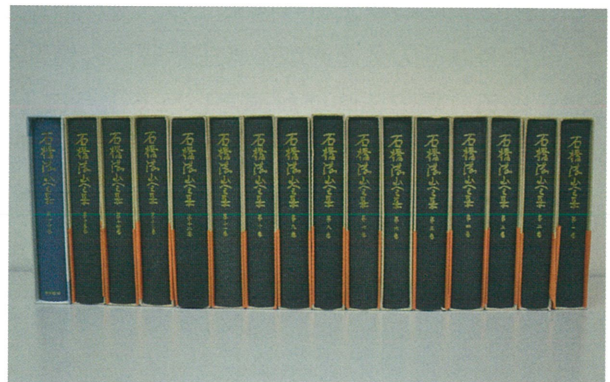
日本はかねて自由主義国として、米国を先頭としてその指揮下に立った国であるが、今後は最早左様にしておられぬ。日本小なりと雖も、理に従い義によって人類のため是を是とし非を非とし、行動することを声明すべきである。非には従わぬ、これこそ我が国の立場である。

「日蓮門下の末席をけがす一人」＝湛山の自覚をよく示している。

ここに、これからの日本のあるべき姿、「立正安国・お題目結縁運動」の方向が示されていると思うが、どうだろうか。



湛山の精神をうけつぐ「週刊東洋経済」



石橋湛山全集全巻
(東洋経済新報社)

釈尊への信仰の輪を広げる

戦後70年が経過した今日、我が国は人口減少や過疎化が進み、これに伴っての三離れの問題など、私たち僧侶や寺院が一丸となって取り組むべき諸問題が生じています。しかしその一方で、グローバル化した現代では、国内における伝統宗派としての立場や活動を保ちながらも、より広く国際的な視点を持つことも不可欠といえます。

一般に、世界三大宗教の一つに数えられる仏教ですが、その宗教人口においては、キリスト教の約22億人、イスラム教の約15億人に対して、仏教徒はおよそ3億人と遠く及びません。さらに追い打ちをかけるように、仏教国であるスリランカやタイ、ミャンマーなどではイスラム教がその勢力を伸ばしており、一説によると、イスラム教徒は今後さらに増加の一途を辿り、キリスト教徒と肩を並べた後に追い越すとの見方もあります。

このような現状に、誰もが世界における仏教の退潮の傾向を感じることに思います。そこで、この状況を打破していくためには、諸宗教との対話や交流を深めるとともに、釈尊一仏を中心として仏教徒が連帯できる世界規模の機運を盛り上げることが考えられます。仏教の原点に戻り、釈尊とその教法のもとに世界中の仏教徒が一丸となって協力し、釈尊への信仰の輪を広げて仏教を興隆していくべきだと考えます。

日蓮聖人は、「日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし」（『報恩抄』）と、久遠実成の教主釈尊に全ての人々が帰依を捧げるべきことを説かれます。

私たちはこの久遠実成の教主釈尊への信仰を堅持しながらも、世界に向けてはあらゆる立場の仏教徒が連帯しうるように工夫して伝えていく必要があります。さらにいえば、私たち日蓮宗徒は釈尊を信仰するという立場だからこそ、世界の仏教徒との団結に寄与することが出来るのではないのでしょうか。そして、釈尊一仏のもとに仏教徒が連帯していく先に、その結果として通一仏土が顕現され、皆帰妙法の祖願達成に近づくことを願っています。